藍澤南城の『周易索隱』について

村山敬三

一　序

越後柏崎の儒者、藍澤南城（あいざわなんじょう）（一七九二～一八六〇）には著作として『周易索隱』がある。現在新潟縣立圖書館に所藏されており、淨書本六卷六冊でほかに初稿本五冊がある。[1] 以下、本稿の考察は淨書本に據る。卷六には序がある。その最後の部分は後に示すように、「文政に建艸して、天保に竣功す。其の閒殆んど二十年。…天保己亥淸秋」となっている。「天保己亥」は天保十年で、南城四十八歳の時にあたる。南城が江戸から南條に歸り、學塾三餘堂を開いたのが文政三年、二十九歳の時であるから、おそらく南城は三餘堂の開塾後まもなくしてこの著の執筆に取りかかったのであろう。

これまで南城のこの著作に言及したものは、內山知也氏の『藍澤南城　詩と人生』[2] だけのようである。內山氏は『周易索隱』の序をすべて書き下し文で示し、「南城の新見解が多く、自信溢れる著述であるが、まだ現代の學者の評價を得ていない。」と述べている。[3] しかし、「南城の新見解」が何かについてまでは言及がない。以下に、『周易索隱』はどのような著述なのか、南城はどのような說を述べているのか探ってみたい。

二　『周易索隱』の體裁と南城の參考文獻

㈠　『周易索隱』の體裁

『周易索隱』六卷は、卷數を記した下に「越後　藍氏著」と書かれている。全漢文は句讀が切られているが、返り點、送り假名は付けられていない。各卷ごとの內容は以下のとおりである。

卷一　乾　坤　屯　蒙

卷二　需　訟　師　比　小畜　履　泰　否　同人　大有　謙　豫

卷三　隨　蠱　臨　觀　噬嗑　賁　剝　復　无妄　大畜　頤　大過　坎　離

卷四　咸　恆　遯　大壯　晉　明夷　家人　睽　蹇　解　損　益　夬　姤

卷五　萃　升　困　井　革　鼎　震　艮　漸　歸妹　豐　旅　巽　兌　渙

卷六　節　中孚　小過　既濟　未濟　繫辭　繫辭下　說卦　序卦　周易索隱序

卷六「繫辭下」は本文すべてについての注解ではない。本文のところどころについての注解となっている。また、「序卦傳」については、本文の注解はなく、次の記述があるのみである。

鄭樵曰、序卦之文、蓋不協矣。有義之苟合者、有義之不苟合者。是豈聖人之言邪。自韓康伯已明其非易之蘊、而未明其所以非也。不可强爲之說。〈六經奧論〉按序卦固後人之所附會、今於論語學庸及老莊等之諸書、爲之章次者、未嘗不本于序卦也。然而其伎倆皆不及于序卦之巧也。序卦何可非哉。（卷六）

（鄭樵曰く、序卦の文、蓋し協せず。義の苟合する者有り、義の苟合せざる者有り。是れ豈に聖人の言ならんや。

韓康伯より已に其の易の蘊に非ざるを明らかにすれども、而れども未だ其の非なる所以を明らかにせざるなり。強ひて之が說を爲すべからずと。〈六經奧論〉按ずるに序卦は固より後人の附會する所にして、今論語學庸及び老莊等の諸書に於て、之が章次を爲す者、未だ嘗て序卦に本づかずんばあらざるなり。然り而して其の伎倆皆序卦の巧なるに及ばざるなり。序卦何ぞ非とすべけんや。〉

鄭樵とは意見を異にして、序卦の文は後人の付會によるものであるが、論語學庸、老莊などの書でも序卦に基づくものがあり、それらの書の技量は序卦に及ばず、序卦は非とすべきではない、と言う。鈴木由次郎氏も「序卦傳があとから考え出された一個の思想體系で」はあるが、「序卦傳が六十四卦の順序に一個の思想體系を見いだしたことは決して意義のないことではない。」と言う。[4]

「雜卦傳」については注釋もなく、全く言及が見られない。

(二) 南城の參考文獻

ところで、南城が『周易索隱』を書くにあたってはどのような文獻を參照しているのか。注釋書の類を擧げてみよう。なお、書名は『藍澤氏三餘堂舊藏書目錄』[5]による。

① 『周易集解』李鼎祚撰
② 『周易正義』魏王弼　晉韓康伯注　唐孔穎達疏
③ 『周易［傳義］』（首書　周易集註）二四卷首一卷　宋程頤傳　朱［熹］本義
④ 『鄭氏周易』三卷付鄭氏周易爻辰圖　漢鄭玄注　宋王應麟編　清惠棟補
⑤ 『易經蒙引』二四卷　明蔡清
⑥ 『易學小筌象意考』便道

⑦『東坡易傳』蘇軾撰

この中で、⑦の蘇軾の引用の仕方は特異であって、巻一から巻三までは見られず、巻四の終わりくらいから引用が多く見えるようになり、五巻、六巻と續いている。その他、『周易擧正』『周易乾鑿度』『盈進齋隨筆』『讀易私說』（伊藤東涯）などの書名が見えるが、みなわずかに一度だけの引用であり孫引きと考えられるものも含まれる。『陔餘叢考』（趙翼）は、繫辭傳上「河出圖、洛出書」について長く引用している。漢儒を批判する內容である。南城の見解は何も記されていないが、本文の解說としてこの引用だけが記されているということは、一應南城も贊成する見解なのだと考えられる。『九經談』（大田錦城）は巻六に「近儒」として引用されている。『朱子語類』は巻一、屯、六三「象曰、卽鹿无虞、以從禽也」についての引用があり、そのほか割注の中で一箇所引用が見られる。

三　「周易索隱序」の內容

巻六の「周易索隱序」で南城はいったいどのようなことを述べているのであろうか。この序によって、南城の易學における大きな方針が理解されるのではなかろうか。そこで、以下にその內容を見てみたい。

○易は文王自筮の言

夫文王之作易也、蓋以自筮而已。身在難而翫易象、思所以免難之方。於是乎繫之辭以自斷其吉凶。周公從而鑽成父之志、使周人奉之以爲占筮之書。所以尊信開國創業之聖君而法象其德也。自周爾來至今三千年、學者奉之以爲萬世不易之經、而不知其爲文王自筮之言者、以聖人之言其所包括深且遠也。

（夫れ文王の易を作るや、蓋し自ら筮するを以てするのみ。身難きに在りて易象を翫ぶは、難を免がるる所以の方

を思へばなり。是に於てか之を辭に繫げて以て自ら其の吉凶を斷ず。周公從ひて父の志を鑽成し、周人をして之を奉じて以て占筮の書たらしむ。開國創業の聖君を尊信して象を其の德に法る所以なり。周より爾來今に至るまで三千年、學者之を奉じて以て萬世不易の經と爲す。而るに其の文王自筮の言たるを知らざるは、聖人の言其の包括する所深く且つ遠きを以てなり。)

文王が易を作ったのは自分で占いをすることだけが目的だった。困難な狀況にあって易象を研究したのは、その困難な狀況から逃れる方法を求めたからである。易象の說明する言葉を考えながら吉凶を斷じた。周公は父の志を深く研究してまとめ、周の人びとに奉じて占筮の書とさせた。開國創業の聖君を尊信してその德を手本として易象を合致させたのである。周より三千年、學者がこれを萬世不易の經としながら、文王の自筮の言であることを知らないのは、聖人の言が包括する範圍が深く遠いことからである、と言う。

何以言之。坤、西南得朋、東北喪朋。西南岐周之方、東北殷之方。出於岐周、而北赴于殷都。一旦離其臣子之類、而所以終有慶者、以其能守臣道也。說者以爲泛占之辭。豈有此理哉。小畜、密雲不雨、自我西郊。亦指岐周之西郊。文王在難、德澤未行。故云爾。豈可以爲泛占之辭哉。蹇、利西南不利東北。亦文王之澤未漸于北方也。解、利西南。復亦如之。說者皆以爲泛占之辭。其義之朦朧不明、職由焉。

(何を以てか之を言ふ。坤に、西南に朋を得、東北に朋を喪ふと。西南は岐周の方、東北は殷の方なり。岐周より出でて、北のかた殷都に赴く。一旦其の臣子の類に離れて、終に慶有る所以の者は、其の能く臣道を守るを以てなり。說者以て泛占の辭と爲す。豈に此の理有らんや。小畜に、密雲雨ふらず、我が西郊よりすと。亦岐周の西郊を指す。文王難きに在り、德澤未だ行はれず。故に爾云ふ。豈に以て泛占の辭と爲すべけんや。蹇に、西南に利あるも、東北に利有らずと。亦文王の澤未だ北方を漸さざるなり。解に、西南に利ありと。復た亦之のごとし。說者皆

以て泛占の辭と爲す。其の義の朦朧として明らかならざること、職ら焉に由る。）

どうしてそう言えるか。坤の「西南に朋を得、東北に朋を喪ふ」は、西南は岐周の方角、東北は殷の方角である。岐周から出て、北の方角の殷都に行く。いったんその臣子の類から離れて、最後に慶びがある理由は、臣道を守ることができたからである。說者は泛占の辭（＝一般的な占いの言葉）とするが、そのような道理はない。小畜の「密雲雨ふらず、我が西郊よりす。」とあるのも、岐周の西郊を指す。文王は難しい局面にあって、彼の德澤はまだ行われていなかったからこのように言ったのだ。泛占の辭ではない。蹇の「西南に利あるも、東北に利有らず」もまた、文王の恩德はまだ北方をうるおしていなかった。解に「西南に利あり」とあるのはやはり同じことで、議論する者は皆これらを泛占の辭としている。解釋が朦朧として明らかでないのは、主としてこれがその理由である、と言う。

○彖傳大象による意味の廣がりと混亂

且夫易素占筮之書、及孔子作彖傳大象也。發其緼、明其奧、然後始合符於論語學庸詩書等、凡語道義者、不必占筮書視之。彖傳乃猶護文王之舊轍、而解其文、至于大象、則不必拘于卦之名義。別自取一象。其說往々出于人之意表。不復襲舊轍。學者解之、大抵拘引於經文、其說又朦朧不明也。

（且つ夫れ易は素より占筮の書なり。孔子彖傳大象を作るに及びてや、其の緼を發き、其の奧を明らかにす。然る後始めて符を論語學庸詩書等に合す。凡そ道義を語る者、必ずしも占筮の書もて之を視ず。彖傳は乃ち猶ほ文王の舊轍を護るがごとくして其の文を解すれど、大象に至りては、則ち必ずしも卦の名義に拘はらずして、別に自ら一象を取る。其の說往々にして人の意表に出づ。復た舊轍を襲はず。學者之を解するに、大抵經文に拘引せられ、其の說又朦朧として明らかならざるなり。）

そもそも易は最初から占筮の書である。孔子が彖傳・大象を作って、易の奧深いところを開き、易の奧に潛んでいた

ものを明らかにして論語學庸詩書等と内容が一致した。（だがその結果、）道義〈＝人の行うべき正しい道〉を語る者は、必ずしも占筮の書として易を見なくなった。彖傳はちょうど文王の舊轍を護るもののように文を解釋しているが、大象では必ずしも卦の名義にこだわらないで、別に自ら一象を取っている。その説は往々にして人の意表に出るもので舊轍を踏襲しない。だから學者も大抵經文に引きずられて、その説はやはりはっきりしないものになっている、と言う。

何以言之。乾大象、天行乾。[6] 君子以自强不息。是取象于日月星辰東西相從不息。乃天行重複之象。舊説、認得穹窿之體、以爲象。故不取重複之義。謬矣。坤大象、地勢坤。君子以厚德載物。是取象于地厚載萬物。乃積土重複之象也。舊説、帶順字解、謬矣。

（何を以てか之を言ふ。乾の大象に、天行は乾。君子以て自强して息まずと。是れ象を日月星辰の東西相從ひて息まざるに取る。乃ち天行重複の象。舊説は、穹窿（きうりう）の體を認得して、以て象と爲す。故に重複の義を取らず。謬まれり。坤の大象に、地勢は坤。君子厚德載物を以てすと。是れ象を地厚く萬物を載すに取る。乃ち土を積み重複の象なり。舊説に、順の字を帶びて解す。謬まれり。）

どうしてこのようなことが言えるのか。乾大象の「天行乾なり。君子以て自强して息まず」は象を日月星辰東西に相從って息まないことに取っている。つまり天が重複を行っているという象である。舊説[7]は、アーチの形體を認得して、それを象としている。だから重複の義を取らないことは、誤っている。坤大象の「地勢は坤なり。君子は以て厚德もて物を載す」は象を大地が厚く萬物を載せるに取っている。つまり土を積むことが重複しているという象である。舊説[8]に、順の字を帶びて解釋するのは誤っている、と言う。

○異説を立てる理由

祇今所以爲異者、凡於此等之處、特用力以闡其幽。若夫每爻之象數義理、亦必博索而詳説之。建艸于文政、竣功于

天保、其閒殆二十年、命之曰周易索隱、林中觀易、古逸之樂事。祇亦以此供獨笑而已。

（祇(し)(ぎ)今異を爲す所以は、凡そ此等の處に於て、特に力を用ひて以て其の幽を闡(あつは)さんとす。若し夫れ每爻の象數義理、亦必ず博索して之を詳說す。文政に建艸して、天保に竣功す。其の閒殆んど二十年、之に命じて周易索隱と曰ふ。林中に易を觀るは、古逸の樂事なり。祇(し)亦此を以て獨笑に供するのみ。）

私が今異說を立てる理由は、凡そこれらのことにおいて、特に力を用いてその隱れたものを明らかにしようとするのである。每爻の象數義理も、同樣に必ず博索して詳說してみる。文政に稿を起こして、天保に完成した。その閒殆んど二十年である。『周易索隱』と名付けた。林中に易を觀るは、古逸の樂事である。私もまたそうした理由から一人で笑うだけで滿足である、と言う。

以上によれば、南城がこの著において何を述べようとしたのか、その意圖が知られる。南城の考えは、易の原初は文王の自筮の言であり、孔子が彖傳・大象を作って、易の緼奧を發明し、道義の意味が加わった。後の道義を語る者は、必ずしも占筮の書として見なくなり、あるいは單に泛占の辭とするだけで、文王の奧義が忘れられてしまった。そこで南城は象數義理を探求して易の奧深い微妙なところを明らかにしようというのである。そこで書名も「索隱」としたのである。

四　注釋の實際

(一)　象數學の立場と互體、卦變、伏卦の法

南城は實際にどのように注釋を書いているのだろうか。乾、初九の注釋を見てみよう。

初九、潛龍勿用。象曰、潛龍勿用、陽在下也。（初九、潛龍用ふる勿かれ。象に曰く、潛龍用ふる勿かれとは、陽下に在ればなりと。）（巻一）

說卦、乾爲馬、震爲龍。而乃今以乾爲龍、何也。曰、龍陽物而神變不測。故於此卦取象。非餘卦乾爲馬之例也。（說卦に、乾を馬と爲し、震を龍と爲すと。而るに乃今乾を以て龍と爲すは、何ぞや。曰く、龍は陽物にして神變測られず。故に此の卦に於て象を取る。餘卦の乾を馬と爲すの例に非ざるなりと。）

「龍」について說卦傳にある說明との矛盾を說明している。この卦では「龍」の「陽物にして神變測られざる」象を取ったのだと言う。續けて言う。

陽爻在最下、爲潛龍之象。是一義也。初變則姤、☴巽爲入〈說卦〉、潛伏之象。〈左傳乾之姤曰、潛龍勿用。之同人曰、見龍云々、可見爻辭皆因變係之矣。〉是一義也。〈姤者大體之巽其象亦同。〉姤伏復、☳震爲龍、伏于坤土之下、爲潛龍之象、是一義也。一陽來伏、十一月之卦也。未可施用、爲潛龍之象、是一義也。〈馬融曰、初九建子之月、干寶曰、陽在初九十一月之時、自復來也《李氏易解》、可以見古人有伏卦之說矣。〉

（陽爻最下に在り、潛龍の象と爲す。是れ一義なり。初變すれば則ち姤、☴巽を入と爲す〈說卦〉、潛伏の象。〈左傳に乾、姤に之くに曰く、潛龍用ふる勿れと。同人に之くに曰く、龍を見る云々と。爻辭皆變に因りて之に係はるを見るべし。〉是れ一義なり。〈姤は大體の巽、其の象も亦同じ。〉姤、伏すれば復、☳震を龍と爲す。坤土の下に伏す。潛龍の象と爲す、是れ一義なり。一陽來伏、十一月の卦なり。未だ施し用ふべからず、潛龍の象と爲す、是れ一義なり。〈馬融曰く、初九は建子の月と。干寶曰く、陽は初九十一月の時に在り、自ら復し來たるなり」と。《李氏易解》以て古人伏卦の說有るを見るべし。〉）

初九の爻辭について、「是れ一義なり」と四つの象を說明している。一つめは乾の☰が、陽爻が最も下にあること

を潛龍の象としてとる。二つめは初變すれば初九が陰爻に變わって姤䷫になり、姤の下卦の巽は說卦によれば入であるから、潛伏の象とする。この卦變については、左傳、昭公二十九年の記事を示し、易は卦變を考えねばならないことの根據としている。三つ目は伏卦の法による。伏卦とは裏面から見た卦のことである。姤䷫の伏卦は䷗復となる。復の下卦、震は龍を象徵しており（說卦）、坤の下にあることから潛龍の象とする。四つ目は、さらに、その復䷗は一陽來伏で十一月の卦であり、陽氣は弱く、施し用いることができないことから潛龍の象とする。

こうしてみると、南城は今日あまり說かれない伏卦の法[10]も使っていることが分かる。しかも南城は、伏卦の法を『周易索隱』全般にわたって用いている。ここで南城は、注釋の最初であるので、みずからの基本的立場である卦變、伏卦の兩說が古人と同じであることについて馬融、干寶を引き、その據り所を示したようである。續けて言う。

若夫文言之說、或以爲隱逸之君子、或以爲未成之德行、或以位言之、或以時言之、易象之含蓄多義、不唯炙轂輹、學者宜玩味焉。

虞舜之嬀汭、伊尹之莘野、傅說之傅巖、太公之渭濱、武侯之南陽等、雖輕重不同、皆可當此爻矣。

（若し夫れ文言の說、或いは以て隱逸の君子と爲し、或いは以て未成の德行と爲し、或いは位を以て之を言ひ、或いは時を以て之を言ふ。易象の含蓄多義、唯だ轂輹を炙るのみならざること、學者宜しく玩味すべし。虞舜の嬀汭、伊尹の莘野、傅說の傅巖、太公の渭濱、武侯の南陽等、輕重同じからずと雖も、皆以て此の爻に當つべし。）

ここでは、文言傳に據って易象が君子、德行、位、時などについての多義を持っていることを言う。「轂輹を炙る」の「炙輹」とは『史記』「荀卿傳」に見える語で、知惠や言辭が盡きないことの喩えである。[11] そして最後に、「潛龍勿用」を歷史上の事例で說明している。

以上見てきたことによって、南城は基本的に象數學の立場であること、さらに解釋の具體的方法として卦變、伏卦の法を重視していることが知られる。

ところで、南城は象數學の立場から卦變、伏卦の法を重視しているが、今日伏卦の法よりもむしろ一般的な互體の法についてはどう考えているのであろうか。では、「履」についての解說を見てみよう。

履䷉（卷二）

履互躰家人、䷤父父子子、兄兄弟弟、夫夫婦婦、而家道正。正家而天下定矣之象。〈論語、哀公問政。子對曰、君君臣臣、父父子子、云云。禮分上下貴賤親疎之謂也。荀子王制、君君子子父父子子、兄兄弟弟、一也。云云。一乃指禮。〉伏謙、䷎謙讓禮之宗也。大躰离、中虛、忠信、禮之質也。

（履の互躰は家人、䷤父は父たり子は子たり、兄は兄たり弟は弟たり、夫は夫たり婦は婦たり、而して家道正し。家を正しくして天下定まるの象。〈論語に、哀公政を問ふ。子對へて曰く、君君たり臣臣たり、父父たり子子たり、云云と。禮は上下貴賤親疎を分かつの謂なり。荀子王制に、君君たり子子たり父父たり子子たり、兄兄たり弟弟たるは、一なり。云云と。一は乃ち禮を指す〉伏すれば謙、䷎謙讓は禮の宗なり。大躰の离は、中虛、忠信、禮の質なり。）

履の象をさまざま述べたのちに、互體の法による解說をしている。南城が言う互體の法を確認しておこう。履䷉の二、三、四爻で䷤、三、四、五爻で䷝のそれぞれ三畫卦ができる。その二つを組み合わせると䷤䷝になり、履の互體は家人ということになる。そして、以下のように言う

余於易也、每卦每爻、考之互躰卦變伏卦。人或未服之、於履之互躰伏卦、詳考之。或知余學不誣矣。（卷二）

（余の易に於けるや、每卦每爻、之を互躰卦變伏卦に考ふ。人或いは未だ之に服さず。履の互躰伏卦に於て、詳か

に之を考ふれば、或いは余の學の誣ひせざるを知らん。）

ここに南城自身が、易解釋を互體、卦變、伏卦の法によるものであることを述べている。同時に「人或いは未だ之に服さず」とあって、これは南城獨自の考え方であることが知られる。

以上のような主張をする南城は、程朱の學に對してどのようなことを述べているのだろうか。需、九五の注を見てみよう。

九五、需于酒食、貞吉。象曰、需于酒食吉、以中正也。（九五、酒食に需つ。貞しくして吉。象に曰く、酒食に需ちて吉は、中正なるを以てなりと。）（卷二）

坎水酒漿之象、且坎二陰中、有一陽。爲充腹之象。离則與坎反。故說卦曰、离爲大腹。腹中空虛枵然之象也。頤☶☳空口之象、故其彖曰、自求口實、噬嗑☲☳充口之象、故其彖曰、頤中有物、曰噬嗑。夫噬嗑之爲卦、九四一爻、頤中之物、且自二至五、大體之坎也。然則今此坎之中爻、故有酒食之象、可知也。

（坎水酒漿の象、且つ坎は二陰の中に、一陽有り。充腹の象と爲す。离は則ち坎と反す。故に說卦に曰く、离は大腹と爲すと。腹中空虛枵然の象なり。頤は☶☳空口の象。故に其の彖に曰く、自ら口實を求むと。噬嗑は☲☳充口の象、故に其の彖に曰く、頤中物有り、噬嗑と曰ふと。夫れ噬嗑の卦たる、九四の一爻、頤中の物にして、且つ二より五に至る、大體の坎なり。然らば則ち今此の坎の中爻、故より酒食の象有ること、知るべきなり。）

需の上卦は☵坎である。そこでまず坎の象について述べている。そして、象數の立場から「坎の中爻、故より酒食の象有ること、知るべきなり」と說明する。續けて言う。

程朱諸家、以陽爻中位和樂之象解酒食。是知義理而不知象數之妙也。苟不知酒食二字本于何象、則其義理雖當、亦昧擲中蚊頭之類耳。五變則泰、☰☷天地交泰、和樂之時。爲需于酒食之象、泰大體之兌、兌爲開口、亦其象也。兌

爲澤、飲食潤身之象。泰互躰歸妹、䷵亦自三至五、坎水〈說如前〉之象。

（程朱の諸家、陽爻中位の和樂の象なるを以て酒食と解す。是れ義理を知りて象數の妙を知らざるなり。苟も酒食の二字何れの象に本づくかを知らざれば、則ち其の義理當たると雖も、亦味きに擲ち蚊頭に中るの類のみ。五變ずれば則ち泰、䷊天地交泰、和樂の時なり。酒食を需つの象と爲す。泰は大體の兌、兌は開口と爲す。亦其の象なり。兌を澤と爲す。飲食潤身の象。泰の互躰は歸妹、䷵亦三より五に至る、坎水〈說前のごとし〉の象。）

と述べて、程朱との違いを言う。象數を重んじる南城の立場が明確に示されている。『本義』は「酒食は宴樂の具、安んじて以て之を待つを言ふ。九五は陽剛中正にして尊位に需つ。故に此の象有り[12]」と注している。

鄭玄に對しては「按ずるに鄭玄象數を說くに、少しく疵病有りと雖も、亦漢人の學なり。餘の易學と符合す。」（卷三）[13]と述べており、やはり南城の立場は漢代の易學に近いものだと分かる。

(二) 卦名の注

南城は序で「每爻の象數義理、亦必ず博索して之を詳說す」と述べていたが、卦名についてはどんな注を付けているのだろうか。「艮」の注釋を見てみよう。

艮䷳（卷五）

艮內外彼此皆止而不行。所謂兩己相背、爲黻。窒慾之象。又君臣上下各止其所。所謂爲人君止于仁、爲人臣止于忠、爲人父止于慈、爲人子止于孝之象。（凡二義）二陰地也。一陽崛起其上。山之象。山上有山、安重又安重、萬古止而不動之象（三義）、艮爲門闕閉鑰。閉之閉、止之象。（四義）一陽止于二陰上。陽動進之物。既至于上則止矣。陰者靜不動之物、上止而下靜、艮之象。（五義）大躰之坎、兩山之閒有塏水、不流動、亦艮之象（六義）、又互躰解、䷧解釋其止之象（七義）、艮伏兌、䷹門闕開闢、與艮反。

（艮は内外彼此皆止まりて行かず。所謂兩己相背にするを黻と爲す、慾を窒ぐの象。又君臣上下各〻其の所に止まる。所謂人君と爲り仁に止まる、人臣と爲り忠に止まる、人の父と爲り慈に止まり、人の子と爲り孝に止まるの象。（凡そ二義）二陰は地なり。一陽其の上に崛起す。山の象。山上に山有り、安重又安重、萬古止まりて動かざるの象（三義）、艮を門關鑰を閉ざすと爲す。閉の閉、止まるの象。（四義）一陽二陰の上に止まる。陽動き之に物を進む。既に上に至れば則ち止まる。陰とは靜、動かざるの物、上止まりて下靜かなり、艮の象。（五義）大躰の坎、兩山の間に埳水有り、流動せず、亦艮の象（六義）、又互躰は解、䷧其の止まるの象を解釋す（七義）、艮の伏は兌、䷹門關開闢す、艮と反す。）

艮は内と外、向こうとこちら、皆止まって動かない。「二つの『己』の字を背中合わせにした模様が黻である」（『尚書』「益稷」孔安國傳）というようなもの。欲望をふさぐ象である。又君臣、上下がそれぞれ自分の場所に止まっている。「人君となって仁に止まり、人臣となって忠に止まり、人の父となって慈に止まり、人の子となって孝に止まる」（『禮記』大學[11]）の象である。（凡そ二義）二陰は地である。一陽がその上にそびえ立っている。山の象である。山の上に山がある、どっしりとした重々しさの上にさらに重々しさが加わる、永遠に止まって動かない象（三義）、艮を門や關所が鍵を閉ざしているとする。閉ざすことに更に閉ざす意味が加わる、止まるの象。（四義）一陽が二陰の上に止まる、陽で動き進む物は、上に着いてしまえば止まる。陰とは靜かで動かない物で、上が止まり下が靜かである、艮の象。（五義）大體の坎は、二つの山の間に穴にたまった水があって、流動しない、同様に艮の象（六義）、又互躰は解、艮の止まる象を解釋する（七義）、艮の伏は兌で、門や關所が開くことで、艮とは反對である、と言う。

艮について、通常無欲や不動の象はよく說かれるが、ここで南城は七義を擧げ、艮の象をさらに多方面から解說している。

㈢ 南城獨自の說

これまで見てきた南城の易學は、象數學によって易の奧義を考えるという南城獨自の立場が明確に感じられるものであった。ここではさらに、南城自身が「獨得の見」だと述べている注を見てみよう。

蹇（卷四）

蹇䷦

坎水艮山、進退兩難、蹇行之象。坎險艮止、遇險而止、蹇行之象。山上之水、未能就下沛然。水行之蹇也。

（坎は水艮は山、進退兩つながら難、行くに蹇（なや）むの象。坎は險艮は止、險に遇ひて止まる、行くに蹇むの象。山上の水、未だ下きに就きて沛然たる能はず。水行の蹇なり。）

この卦象について「山上の水、未だ下きに就きて沛然たる能はず」として「水行の蹇」まで說いているのも獨特だと思われるが、さらに續けて言う。

九五陷在于二陰小人中、六二之臣、欲救拯之、而爲九三所阻之象、君臣皆在蹇難也。艮東北之卦也。坎正方之卦也〈說卦之文〉正北有水、而縈帶焉、從岐周望殷國、則其方也。以山河之險、比殷紂政治之險。文王欲盡忠於天下、而蹇難不可行。故治西南而爲之伯。經文利西南不利東北、及解卦利西南等、乃就平避險之謂也。坤彖所謂西南得朋、東北亡朋、亦豈唯泛示占者之辭哉。文王之意、其深矣哉。是祇獨得之見、學者頷之否。

（九五陷りて二陰小人の中に在り、六二の臣、之を救拯（きうしよう）せんと欲すれど、九三の阻む所と爲るの象。君臣皆蹇難に在るなり。艮は東北の卦なり。坎は正方の卦なり〈說卦の文〉正北に水有りて、縈帶（えいたい）す。岐周より殷國を望むは、則ち其の方なり。山河の險しきを以て、殷紂政治の險しきに比す。文王忠を天下に盡くさんと欲して、蹇難行くべからず。故に西南を治めて之が伯と爲る。經文西南を利とし東北を利とせず、及び解の卦に西南に利あり等、乃ち

平に就き險を避くの謂なり。坤の彖の所謂西南に朋を得、東北に朋を亡ふも、亦豈に唯だ泛く占者の辭を示すのみならんや。文王の意、其れ深きかな。是れ祗(し)獨り得るの見、學者之に頷(うなづ)くや否や。)

「西南を利とし」とは、文王が「蹇難行くべからず。故に西南を治めて之が伯と爲る」こと、「東北を利とせず」とは「岐周より殷國を望」んで、「殷紂政治の險しき」がために「蹇難行くべからず」としたこと、とする。このことは序でも「蹇に、西南に利あるも、東北に利有らずと。亦文王の澤未だ北方を漸(うるほ)さざるなり。」などと述べられていた。南城の主張は經の「西南を利とし東北を利とせず」はまさに文王の當時の狀況にそって述べられたもので、そのことを忘れて卦辭を單に占辭としてだけ考えてはならないということである。

さて、序では「西南を利とし東北を利とせず」以外の二つ、つまり坤「西南得朋、東北喪朋」や小畜「密雲不雨、自我西郊」について南城の主張が述べられていた。このような南城の、易は文王自筮の書であるとの說は、南城が自信を持って述べている說のようである。では、南城と同じことを述べている有力な說はあるのだろうか。管見においては「西南得朋、東北喪朋」にはそのような說は見當たらない。しかし、次の小畜「密雲不雨、自我西郊」の注では南城自身が「優れりと爲す」と同調する說が引かれている。

小畜亨。密雲不雨。自我西郊。(小畜は亨る。密雲雨ふらず。我が西郊よりす。)(卷二)

我西郊、程云、東北陽方、西南陰方、自陰倡故不和而不能成雨。據四而言。故云自我。朱云、西郊陰方、我者文王自我也。文王演易於羑里、視岐周爲西方、〈祗〉按羑里演易、司馬遷始言之。蓋古來相傳之說矣。繫辭亦云、作易者、當殷之末世周之盛德乎。又云、作易者、其有憂患乎。是雖不適指其人、而似暗當文王矣。依此等之說、此注朱子爲優。

(我西郊は、程云ふ、東北は陽の方、西南は陰の方、陰より倡(いざな)ふが故に和せずして雨を成すこと能はず。四に據り

て言ふ。故に我よりすと云ふと。朱云ふ、西郊は陰の方、我とは文王自ら我なり。文王易を羑里に演ぶるに、岐周を視て西方と爲すと。〈祇〉按ずるに羑里に易を演ぶは、司馬遷始めて之を言ふ。蓋し古來相傳の説なり。繫辭も亦云ふ、易を作るは、殷の末世、周の盛德に當るかと。又云ふ、易を作る者は、其れ憂患有るかと。是れ適に其の人を指さずと雖も、暗に文王に當つるに似る。此等の説に依り、此の注朱子を優れりと爲す。〉

程伊川の説のあと、朱子の「西郊は陰の方、我とは文王が自分で我と言ったのである。文王が易を羑里で展開した時に、岐周を視て西方とした」との説を引き、司馬遷や繫辭傳の言葉も據り所と示しながら朱子の説を優れているとしている。「司馬遷始めて之を言ふ」とは「太史公自序」に「昔西伯拘せられて羑里に周易を演ぶ。[15]」と見えることを指している。續けて言う。

且此卦柔遜之巽、而畜止剛健之乾、有似于文王。羑里之時、以柔遜免殷紂剛暴之害矣。又有似于文王中有剛健之德、而外行柔遜之道。所謂三分有二而服事于殷矣。〈…略…〉故知密雲不雨者、文王在厄、德澤未施于天下之象。於戲此彖辭之寓意、其深矣哉。

（且つ此の卦は柔遜の巽にして、剛健の乾に畜止するは、文王に似る有り。羑里の時、柔遜を以て殷紂剛暴の害を免かる。又文王は中に剛健の德有りて、外は柔遜の道を行ふに似る有り。所謂三分して二を有ち殷に服事す。〈…略…〉故に密雲雨ふらざるを知るは、文王厄に在り、德澤未だ天下に施さざるの象。於戲此の彖辭の寓意、其れ深きかな。）

加えて、この卦は柔遜の巽で、剛健の乾に止まっているのは文王に似ている。羑里の時、柔遜を以て殷紂剛暴の害を免かれたこと、又文王は剛健の德を持ちつつ外は柔遜の道を行ったことなどである。「天下を三分してその二を保ちながら殷に仕える」（『論語』[16]）に該當する。「密雲雨ふらざるを知る」とは、文王が厄に在り、德澤が天下に施されていな

い象なのである、と言う。

本田濟氏は「我というのは作者、周の文王自身。文王が羑里にとらわれて、易の辭を書いていた時が、まさに小畜（すこしとどむ）の時。羑里から見れば周は西に見える。」と言う。[17] この見解は朱注に從ったもののようである。また、鈴木由次郎氏は「卦辭が果たして文王の作であるかどうかはきわめて疑わしい。朱熹のように強いて文王の事とみなくてもよいであろう。[18]」と言っている。

四　まとめ

以上南城の易注釋の實際を見てきた。南城は「凡そ易象の妙、典要を成すべからざるなり。」（卷一）と言う。「典要を成すべからず」とは、一定不變の法則を定めることはできないの意である。「繫辭傳下」に「典要を爲すべからず。唯だ變の適く所のままなり。（不可爲典要、唯變所適。）」とあるのに據ったものであろう。南城は卷一以降の注の中でも、何回かこの言葉を使っている。易象は變化するものであり、多面性をもつところに易の妙趣があるのだから一象一義に固執すべきでないとの考えは南城の易學の中心をなすものである。そこで南城は、常に「～之象」、または「一義也」を列擧する注釋を書いている。象數を說明する注釋のスタイルは『周易索隱』全體に一貫しているのである。

五　結語

以上見てきたところによって、小稿の結論をまとめておきたい。

『周易索隱』卷六の「序」によれば、易の原初は文王の自筮の言であったが、孔子が彖傳の象を作って易の緼奧を發明し、道義の意味が加わると次第に易が必ずしも占筮の書として見られなくなり、泛占の辭とするだけで文王の奧義が

忘れられてしまった。そこで南城は象數義理を探求して易の奥深い微妙なところを明らかにしようした、と分かる。南城は象數學の立場にたって、卦變、伏卦、互體の法を解釋の具體的方法として重視する。そこで、易學の傾向としては程朱よりも鄭玄に對して同調する。南城は易の卦と文王に關する歴史とを密接に關連させて考えている點を獨自性を持つものだと自分でも考えている。その說に關して「密雲不雨、自我西郊」の注では朱注を優れている評價している。南城が學派の如何よりも、個人の說の內容を重視して贊否を考えていることが分かる。「凡そ易象の妙、典要を成すべからざるなり。」と南城は言う。易象は變化するところに妙趣がある、一象一義に固執してはならないとの考えは南城の易學の中心をなすものである。

さて、小稿においては南城の易學の中心を成すものを解明すべく考察を行った。もちろん全六卷もある著作であるから、小稿だけでは南城の易學の解明は不十分である。邦人による易の著作が數多くある中で、南城の『周易索隱』はどのような位置に置かれるであろうか。この著作の持つ價値はどのような點にあるだろうか。小稿がそうした檢討の契機になるとしたら幸いである。

注

(1) 大沼晴暉氏の『藍澤氏三餘堂舊藏書目錄』(斯道文庫論集　第三十三輯　一九九九年)によれば、初稿本は自筆で、淨書本は「寫(朴齋カ)」である。

(2) 內山知也『藍澤南城　詩と人生』、東洋書院・一九九四年。

(3) 內山氏前揭書、七六～七八頁。

(4) 鈴木由次郎『易經』下(全釋漢文體系第九卷・集英社・一九七四年)、四六五頁。

(5) 1の注參照。

(6) この原本の「乾」は「健」の書き誤り。巻一「乾」では「健」と書かれている。

(7) この舊說とは周易正義の疏の說だと思われる。「象曰天行健君子以自强不息」の疏には「天行健者、行者、運動之稱、健者、强壯之名、乾是衆健之訓、今大象不取餘健爲釋偏說、天者萬物壯健、皆有衰怠、唯天運動日過一度、蓋運轉混沒未曾休息、故云天行健。」とある。

(8) 『周易』の注に「地形不順其勢順」、疏に「地勢方直、是不順也。其勢承天、是其順。」とある。

(9) 南城の名。

(10) 伏卦は京房の飛伏の說から來たものという。兼坂晉『易學概觀』(博文館・一九三三年)、一〇一頁。

(11) 『史記』には「炙轂過髡」とあるが、『集解』によれば、劉向『別錄』には「過」を「輠」に作る、と言う。

(12) 「酒食宴樂之具、言安以待之、九五陽剛中正需于尊位、故有此象。」

(13) 「按鄭玄說象數、雖少有疵病、亦漢人之學也。與余易學符合。」

(14) 『禮記』大學篇に「詩云、穆穆文王、於緝熙敬止。爲人君止於仁、爲人臣止於敬、爲人子止於孝、爲人父止於慈、與國人交、止於信。」とある。

(15) 「昔西伯拘羑里演周易。」

(16) 『論語』泰伯篇に「三分天下有二以上服事殷。」とある。

(17) 本田濟『易』(新訂中國古典選・朝日新聞社・一九六六年)、八三頁。

(18) 鈴木氏前揭書、二〇六頁。